

# 書評：巽由樹子著、『ツァーリと大衆——近代ロシアの読書の社会史』、東京大学出版会、2019年

## Book Review: *Tsar and Masses: A History of Reading in Imperial Russia* by Tatsumi Yukiko

篠原 琢

SHINOHARA TAKU

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

原稿受理日：2020.1.12.  
*Quadrante*, No.22 (2020), pp.99-109.

### 目次

はじめに  
本書の視角  
本書の構成  
本書の結論  
全体を通じて

### はじめに

近年、日本におけるロシア・ソ連史研究は、中堅・若手研究者が活躍し、大きな活況を見せている。2015年の幕張における国際中欧・東欧研究協議会 (International Council for Central and East European Studies, ICCEES) の成功や、ロシア革命百周年を記念して出版された5巻本、『ロシア革命とソ連の世紀』(岩波書店)などにその成果は明瞭に現れており、個性的な研究者が星雲状に集まって、問題意識、研究のエトス、ある種の文化を共有しているのが壮観である。本書の筆者、巽由樹子もいうまでもなく、そのなかの星の一つである。すでに2013年、中嶋毅編著、『新史料で読むロシア史』(山川出版社、2013年)に同人たちの集まりを見ることができる。

ある分野にある世代の優れた研究者が集まるのは、当事者からすれば偶然としかいえないことが多い(誰でもたいていグループ分けさ

れることを嫌う)。しかし、それぞれの研究は独自なものだとしても、星雲状の研究者集団が生まれたことを研究の動向のなかに位置付けることは可能なように思われる。ソ連解体(帝国の崩壊)と研究枠組みの変容に伴う、ロシア・ソ連史研究の活況が、当時、研究テーマを選ぼうとしていた人々に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。ただし、政治的な事件は、すぐには研究史の変化を呼ばなかった。溪内謙『現代史の読み方』(岩波新書、1995年)や、塩川伸明の『ソ連とは何だったか』(勁草書房、1994年)をはじめとする当時の諸著作が証言するように、1990年代前半はむしろ、ロシア・ソ連史の解釈をめぐる議論には、政治的な態度が前面に出て、研究の方向性が見失われがちな時期だった。帝国論を媒介に、ロシア・ソ連史研究で徐々に新しい枠組みが形成され、研究者たちを引き付けるようになったのは、すでに2000年を過ぎたころであろう。日本では、松里公孝や宇山智彦の活躍が大きな役割を果たした。星雲を形成するようになった研究者たちは、このころ、研究の道を定めつつあったのではないだろうか。

筆者が専門とするハプスブルク君主国の歴史でも、ロシア史でも、帝国は専制的で時代錯誤の存在であり、近・現代史の流れのなか



で衰亡、解体を運命づけられている（はずだ）、という暗黙の前提が長らく存在してきた。それは歴史叙述にはいまだに残るものの、研究者たちには、はっきりと退けられるようになっていく。このような見方の背後には「帝国から国民国家へ」という歴史像がある。国民国家・国民社会の形成に対する批判的検討、現代のグローバル権力の把握（ネグリ／ハートの『帝国』、山下範久など）の両面から、こうした歴史像は、維持できなくなっていく。諸帝国についての歴史研究は、近代をめぐる「大きな物語」から解放されたといってよいだろう。これによって研究の地平は広がり、実証研究の課題は飛躍的に増えたのである。

ロシア帝国、ハプスブルク君主国の統治は、専制的でも、絶対主義的でもなかった。帝国統治は、帝国中央から行使される専制権力によって一方的になされるのではなく、中央政府と、地域住民の統治を担う地方エリートとの複雑な交渉によって構築されるものであることを実証研究は明らかにしてきた。ハプスブルク君主国の場合、複合国家としての性格を帝国崩壊まで維持し、中央権力と各領邦の地方エリートは、国制上の正統性を重視しながら、地方統治をめぐる交渉を展開した。ロシア帝国の場合、20世紀初頭に至るまで国制上は専制が維持されているが、近年の帝国論は、帝国と民族エリートや宗教勢力との交渉や相互依存関係を重視している。こうして帝国論のなかでは、統治における社会や各地方の自律性が指摘されているのである。

伝統的なロシア帝国論、ハプスブルク君主国論では、帝国権力は社会に対峙するものとして描かれてきた。それどころか、ロシア帝国の場合、全能の国家が社会を圧服する、あるいは国家と社会が一体化して、自律的な社会領域は存在しなかった、という見解すらあった。それはロシア帝国とソ連の連続性、そして、ヨーロッパ社会との違いを強調する一種の文明論でもあった。しかし、帝国統治が専制権力に

よるものではなく、帝国中央と社会や地域エリートとの相互交渉によって実現するものだとすれば、社会の自律性が前提となり、その様態が実証的に検討されなければならない。この課題から、帝国史研究で、「市民社会」概念は変容し、拡大して検討されるようになった。はたして20年前、ハプスブルク君主国はともかく、ロシア帝国における「市民社会」などという問題設定は可能だっただろうか。

「市民社会」の概念の拡大については、ハプスブルク君主国史について、ゲイリー・コーエンが次のように述べている。

「ここでは『市民社会』という概念を広く、目的論的ではない意味で使おう。形式的には国家から独立し、公的なことから、政治、統治の諸問題について、個人、あるいは集団が語り、行動するような圏域として考える。近代の諸社会では、市民社会は、非常に多様な現れ方をする。19世紀においては、集会や新聞・雑誌、自発的結社、人々の市民的行動 popular civic action、社会運動、政治運動、政党など、民衆が自由に起こすさまざまな現象 free popular phenomena をあげることができよう。市民社会は、労働の場、カフェ、サロン、または家族に発する社会的つながりに依拠するものである。」

(Gary Cohen, "Nationalist Politics and the Dynamics of State and Civil Society in the Habsburg Monarchy, 1867-1914", *Central European History*, 40, 2007)

ここでは、「市民社会」概念は従来「目的論的」に使われてきた、という指摘と、「市民社会」を多様で、多方向的な「社会的つながり」として見ようとする視点、そしてこれをある種の価値の体現ではなく、いわば現象として考える態度が重要である。ハプスブルク君主国における最後進地域、ガリツィアについて論じた

ストーリー＝ハルステッドは、農村における「公共圏」を次のように論じた。

「農民的な文脈における『政治』とは、非常に多様な文脈で行われる公的な議論からなるものである。それは村の牧地で行われる気取らない集まりから、公式の結社、政治組織での会合まで含むが、もっとも重要なのは、民衆文化におけるやり取りであろう。私は、公共圏 public sphere という概念をハーバーマスが考えた都市的、ブルジョワ的起源を超えて、農村でのやり取りや、選挙権を認められなかった農民というアクターまでを考慮に入れて考えたいと思う。」

(Keely Stauter-Halsted, *The Nation in the Village. The Genesis of Peasant National Identity in Austrian Poland 1848-1914*, Ithaca, 2001)

「公的な議論」、「公共圏」という語を使っているが、これらはコーエンの書く「市民社会」に相応するものである。ここでは、「村の牧地での集まり」、農閑期の機織りや縄ないといった場でのやり取りまでもが農民的「公共圏」に含まれるのである。この実態の検討は、帝国統治に「下から」参与する多様なアクターの検出を可能とする。ロシア帝国のムスリム統治について、タタール社会と帝国との関係を分析した長縄宣博の著作は、これよりはさらに制度化されたムスリムの公共空間の形成を論じている。この研究は、帝国における「公共圏」、または「市民社会」を論じたものとして非常に重要である。以下の長縄のロシア帝国研究に対する方法論的態度は、ハプスブルク君主国の研究動向と強く共鳴するものである。

「近年では、ロシア史や中東ムスリム社会研究に限らず、市民社会を資本主義の発

達や民主主義体制の成立に結びつける見方自体が批判に晒され、市民社会を到達すべき終点に置くのではなくむしろ理念型として捉えることで社会と政治の変化を分析する方法が模索されている。例えば、自発的結社や地方自治体と国家との関係を見直す議論では、強圧的な政府が公共圏と対立するという構図ではなく、結社や自治体が愛国や福祉の目的で国家行政を補完しながら、独自の行動の幅を広げる姿が重視されている。…ロシアのムスリム地域の事例は、公共空間での理性的な熟議という現象がこれまでいかに限られた時空間に独占的な美德として捉えられてきたかという点に反省を促す強力な参照点になる。…本書もまた、帝政ロシア末期の多宗派公認体制の下で、宗教共同体のあり方を決める権威が国家から公共圏へと部分的に移行した事態を捉えようとするものである。」

(長縄宣博『イスラームのロシア——帝国・宗教・公共圏 1905-1917』、名古屋大学出版会、2017年)

巽由樹子『ツァーリと大衆』は帝国における市民社会をめぐるこのような研究動向のなかに位置付けることができるだろう。巽の扱うのは、より洗練された「読書する大衆」の世界である。巽はこれを「読者大衆」と言っているが、それについては後で検討しよう。

### 本書の視角

本書は、19世紀末のロシア社会において、「ツァーリ」と「民衆」が対峙していたのではなく、「読書する大衆」の世界が出現したことの歴史的意義を論じるものである。巽が、「読書する大衆」を、「市民社会」として捉えていることは明らかだが、まずロシア社会に当てはめることについて、序章で慎重な検討がなされている。なぜなら、「ロシアに公共圏や市民社



会を見出そうとする議論に対しては、西欧的枠組みを単純に適用している、との批判もやはり根強く、『ミドルクラス』は西欧社会の形成史を念頭に置いた分析概念であるため、それをロシアに適用するという枠組み自体についての批判が惹起される」(p.10) からである。本書でも引用されているルイズ・マクレイノルズによれば、ロシアのミドルクラスの分析は、西欧の政治・経済構造のなかで生まれたミドルクラスのあり方を評価軸として行われ、その差異から、なぜ「自分たちの自身の政治制度を築くことに失敗したのか」という観点から、いわば目的論的に論じられてきた（「帝政ロシアのミドルクラスは、結末の見た政治的予言の犠牲者となる運命を余儀なくされた」）。この矛盾を避けるため、マクレイノルズは、「単に政治構造、経済構造の変化だけでなく、個々人の思考の変化」を調べることが有効だとし、「ミドルクラスの生き方を調べるにあたって、レジャーに注目」した。なぜなら「娯楽産業はロシアに特有の国家体制や社会通念に影響を受けつつ定着し、都市民は余暇の楽しみを自ら選択して購買して、西欧と同様、消費者としての個人意識を持つようになった」からである。（ルイズ・マクレイノルズ(巽ほか訳)『〈遊ぶ〉ロシア—帝政末期の余暇と商業文化』、法政大学出版会、2014 年）

巽は、19 世紀後半、識字率が向上し、「企業勤務者や専門職者、商人ら都市の中層民から、町人、職人、労働者といった下層民に至る、『読者大衆』と呼ぶべき存在が現れた」、と指摘し、多くの人の手に届く「絵入り雑誌」を題材に、マクレイノルズにならって、次のような見通しを示している。「ロシアの絵入り雑誌もまた、都市の大衆に受容され、新たな価値規範を広めて社会的、政治的転換を準備したメディアだったのではないか。…このメディアは近代ロシアにおいて、『ツァーリ』と『民衆』ではなく、『ツァーリ』と『大衆』を対峙させる役割を果たしたのではないか。」この見

通しの上にたって、本書は「1870 年代以降に普及したロシアの絵入り雑誌がどのような新しい主体と文化を生み出し、それが旧来の秩序にいかに関与を与えたかを明らかにすることを目的とする」。この「新しい主体と文化」こそ、ロシアにおける「市民社会」と捉えることができよう。

このような流れは、ドイツ史における「特別な道 Sonderweg」論争から、市民層 Bürgertum 研究への展開を直ちに想起させる。「特別な道」論争でもまた、ドイツ近代における「市民社会」の弱さ、あるいは「歪み」が論じられ、その後、議論は市民層概念の拡大へ、その価値観、エトス、生活態度など、文化の検討に向かったのだった。

## 本書の構成

本書は以下のように構成されている。

「絵入り雑誌」の登場と「読者大衆」の成立

第 1 章：絵入り雑誌の登場と近代ロシアのメディア構造

第 2 章：読者大衆の成立

II. 諸「社会勢力 Social forces」と消費文化・読者大衆

第 3 章：インテリゲンツィヤと出版——評論家  
ヴラジーミル・スターソフの闘争（インテリゲンツィヤ）

第 4 章：ナロードと出版——農民企業家と正教  
ジャーナリストの連帯（ナロード）

第 5 章：専制と出版——ニコライ二世の肖像を  
めぐって（専制）

III. 結論：帝政末期の読書の社会史

第 1 章は、ロシアにおける出版産業の成立と「絵入り雑誌」のはじまりを論じている。ロシアの出版産業はヨーロッパの経験を移植して成立し、そもそもの最初から国際的な文脈のなかに置かれていたという指摘が大事な点である。出版業の第一世代を代表する人物はワルシャワ（当時ロシア領）出身のマヴリーキー・

ヴォリフで、彼はパリ、ライプツィヒを経て、リヴィウ、クラクフ（オーストリア領ガリツィア）に移り、ペテルブルクで成功した。分割ポーランド領間の知や経験の循環は、それ自体として興味深い。ここでは帝国を跨ぐポーランド語圏を通して、ヨーロッパ社会の経験がロシアに媒介されたことが重要だろう。こうしていったんネットワークが形成されると、ロシアの出版界には、ヨーロッパ出版業の中心から人材が供給された。第二世代のアドルフ・マルクスは、ヴォリフ社のドイツでの求人に応じてペテルブルクへやってきたのだった。ロシア出身の出版企業家は、第三世代のアレクセイ・スヴォーリンを待たなければならなかったが、彼については第4章で詳しく扱われる。

「絵入り雑誌」は西欧起源の出版ビジネスだった。営利事業として確立した出版業には、異によれば「二つの支配——被支配関係」があったという。第一は出版社と書き手との関係であり、出版社は「購読者や広告主の支持」に応じて、書き手の起用や原稿料を決めたという。出版業の確立とともに職業作家も生まれたが、彼らはこの点で、出版社に依存していた。第二は出版社と地方書店との関係である。地方書店は、郵送のために定期購読料を出版社に前払いしなければならなかったが、広大なロシアでは「刊行物が届くまでに相当の日数を要し」、新聞などの場合、しばしばアクチュアリティが失われた。

そのような問題はあったにしても、ロシアでは出版業が成立し、書物・定期刊行物の流通が制度化され、職業作家が誕生し、それを期待する読者層が確立した。著者によれば、「西欧からやってきた出版事業者たちと、彼らが経営の主軸とした絵入り雑誌によって、インテリゲンツィアのメディアとナロードのメディアとのあいだに新しい出版と読書の領域が創り出されたのである。」(p.44)

第2章が扱うのは、読者の姿である。19世紀後半のロシアでは、いうまでもなく民衆の識

字率の向上と啓蒙を目指したインテリゲンツィア（ナロードニキ）の運動が存在した。異はしかし、「インテリゲンツィアとナロードという二項対立」から離れて、インテリゲンツィアの勧める「良書」でも、ナロードに馴染みの絵入り民衆譚、ルボークの世界でもない、新たな「読書行為」が現れたとして、「絵入り雑誌」の読者世界を分析しようとする。ここに現れるのは、「必ずしも貧しいわけではないのに、『無知』で『ただ読むだけ』という読者の姿」(p.59)であった。「いまどきの日本の大学生がトルストイやドストエフスキーを知らず、ロシア文学の教員が絶句するという話を聞く」が、「本場ロシアで文豪たちが名を馳せた時代にも、身なりのよい読者が無知をさらして識者がショックを受ける、というよく似た事態があった」というのである（ちなみに、本書には、このような「軽い」コメントが随所にあって読者を楽しませてくれる）。この人々が本書の主役、「読書する大衆」である。

「読書する大衆」には、非ロシア語話者も含まれた。ロシア語の「厚い雑誌」（知的・文化的程度の高い人々に向けて、文芸・政治・社会評論などが掲載された重厚な雑誌）は、ロシア帝国の民族知識人にとっても、彼らの欠かすことのできない知的世界の一部を構成していた。異は、絵入り雑誌についても、『ニヴァ』の流通を分析して、購読者は「主としてロシア人から構成されつつも、帝国内諸民族のロシア語使用者を含んだ可能性がある」と指摘している。ハプスブルク君主国の場合、識字率の向上、出版業、特に「軽い読み物」の拡大は、諸民族言語による出版文化の成長を促した。ドイツ語による読書能力が期待できない非エリート層にも読書の実践が拡大したからである。この過程は相互的だった。この点、ロシア帝国ではどうだったのだろうか。

さて、本章で異は、「絵入り雑誌」が新しい生活規範、生活スタイルを提示し、絵入り雑誌という「軽い読書」をする人々が、共通の

文化資本（振る舞い、服装）を獲得していくことを論じている。こうして新しい社会的実態として、「読書する大衆」が出現した。つまり、「『軽い読書』をする人々は）帝国内リング・フランカとしてロシア語を用いる非ロシア人を一部に含みつつ、企業家やそこでの勤務者、あるいは医師、弁護士、教師のような専門職者、商人といった都市の中層民と、町人、出稼ぎ労働者といった都市下層民ら、『大改革』後に現れた新しい階層から構成される読者だった。」（cf. p.98）ただし、本章冒頭の問題設定にあらわれる「ナロード」と、ここにいう「大衆」との関係概念を、また歴史的実態としてどのように整理するか、という問題は残る。「絵入り雑誌」の読者と民衆啓蒙活動の対象となった人々はどの程度重なるのだろうか。本章には、仕立て屋を描いた印象深い絵が掲げられている。親方と徒弟のいる工房の壁には、注文主から送られてきたのであろう、「絵入り雑誌」が提示する新しいモードの図版がぶら下げられている。ただし、親方と徒弟はもちろん、ルパシカを着て、いかにも「ナロード」風の佇まいであった。

第2章で「新しい出版メディア」と「読者大衆」の出現を語った上で、異は、「そうした現象に直面して、『インテリゲンツィア』、『ナロード』、『専制』という三つの勢力と出版との関係はどのように変化したのだろうか」という問題に進んでいく。第3章で扱われるのは、そのうち、インテリゲンツィアと出版との関係であり、主人公はヴラジーミル・スターソフである。彼は、最初「厚い雑誌」で評論活動に健筆を振るう「インテリゲンツィア」だったが、やがて『ニーヴァ』などの絵入り雑誌に活動の場を移していった。スターソフは、「厚い雑誌」でリアリズム芸術を熱烈に擁護しながら論壇に容れられず、その後約20年間、主張を枉げないまま、今度は大衆向けの雑誌で同じ立場を頑固に守り通した。すでにモダニズムが台頭し、レーピンらかつてのリアリズム画家たちも芸術態度を

変える中、スターソフの擁護するリアリズムはもはや芸術潮流としては平俗化し、わかりやすい商品、装飾芸術の一貫として読者に受容されたのである。異はスターソフの道程を次のように評価している。「彼は、『大改革』後に現れた営利主義的な出版社と読者大衆に相對することとなり、それを激しく批判した。闘争の果てに論壇から干されたスターソフが…絵入り雑誌に執筆したのは、インテリゲンツィア出身の評論家としては転落だったと言えるかもしれない。しかし自らの思想の新たな受容者を見出し、広汎な階層にロシア国民芸術を共有させるという初期の使命を達した、と考えることもできるだろう。」（p.104）「世紀末に至って、営利的な媒体は、それ（インテリゲンツィアの産物）を自らのコンテンツとすることに成功したのである。」

新しい出版メディアと読者の登場によって、知と芸術が商品として消費されるようになったともいえるだろう。同時に、それはいかに通俗化したとはいっても、読者大衆の強い「文化資本」への憧れ、欲求を反映したものだといえよう。インテリゲンツィアは、社会を指導する役割から、読者大衆の欲求を満たす知的商品の生産者となったのだった。

第3章に続いて、第4章では、こんどは「ナロード」と新しい出版メディアとの関係が考察の対象となる。ここでの主役は「ナロード出身の出版人」、ピョートル・ソイキンである。彼は元農奴の家に生まれたが、古典ギムナジアまで進学し、その後出版事業に携わることになった「大改革の申し子」である。民衆向けの科学雑誌『自然と人間』を刊行して民衆啓蒙に貢献した、というのがソ連期の評価だが、彼は同時に絵入り宗教雑誌『ロシアの巡礼者』も刊行していたという。この人物を取り上げることによって異は、「ナロード出身企業家による出版事業は必ずしも民衆の科学的啓蒙に専心したのではなく、固有の性格を持っていたことを示して、ナロードと出版機構のあいだに形



づくられた新しい関係を明らかにしたい」と問題を設定する。

ソ連期に「民衆啓蒙に貢献した」とされた「科学雑誌」『自然と人間』に対する異の評価は次のようなものである。この雑誌は「むしろ中世以来の見世物の系譜を引いていた。すなわち図像と結びついた科学は、娯楽性を固有の性格とするポピュラー・サイエンスだったのである。」「(ソイキン社の)看板雑誌は娯楽的な似非科学を扱ったのである。すなわちソイキンは、19世紀後半のロシアに新しく入ってきたメディアと『軽い』学知に目をつけ、ビジネスに成功した。」本書には、『自然と人間』から引用された奇怪な絵図が著者の呆れた調子のコメントともに多数収録されている。

この「ビジネス」に成功したソイキンは、やがて宗教雑誌の刊行を手がけるようになる。はじめ絵入り宗教雑誌『ロシアの巡礼者』を発刊したのは、アレクサンドル・ポポヴィツキーだった。異によれば、「宗教的、道徳的内容の挿絵入り出版物という初めての試み」であり、「類例のない刊行物である。」神学教育を受けたポポヴィツキーは、『大改革』期、世俗的知識人が科学主義を推奨して民衆啓蒙活動をした傍らで、正教関係者の中から現れた聖職者出身の知識人」であり、このような雑誌を通じて、「自らもよく知るナロードの世界観の維持を願った」のであった (p.134)。この雑誌が部数を減らすと、やがてその発行はソイキン社が引き受けた。ソイキン社は、読者に「ナロードに属する人々も相当数含まれることを意識し」て (p.131)、誌面構成を変えた。それはソイキン社にとって、「ナロードは、…その生活文化が尊重されるべき顧客だった」からである。「科学雑誌」にせよ、「宗教雑誌」にせよ、ソイキン社が重要視したのは、「ナロード」を含む読者層の嗜好・思考法を敏感に察知し、それにあわせて雑誌を作ることだったのである。

このソイキン社の戦略を異は次のように評価

している。「ナロードは近代的なメディア構造の中で、発信と受信の主体となった。言い換えれば、新しい出版機構の成立によって、20世紀初頭までに、ナロードがマス・メディアの情報に接する回路が出来上がったのだった。」 (p.136) ここにいう「発信と受信の主体」とは、「インテリゲンツィア」に教化されるべき客体というイメージと対をなしている。「ナロード」出身のソイキンは、「ナロード」に合わせて、出版活動を展開したのであった。

本章では、『自然と人間』、『ロシアの巡礼者』との読者層が両方ともナロードであり、重なっていることが示唆されている。果たして、第3章まで扱われてきた、たとえば『ニヴァ』の読者とは重なるのだろうか？ 本章では、「(読者)大衆」という語はほとんど使われず、ナロードが読書の主体として語られているのも見逃せない。

第5章は、専制と出版との関係を検討する。検討の具体的な対象はツァーリと王朝の画像である。著者は本章で、出版メディアが介入することによってツァーリ像が変化することを論じる。つまり、「出版メディアは君主の意図通りにツァーリのイメージを伝達したのではなく、固有の文化によって編集したこと、そして世紀転換期に、最後の皇帝ニコライ2世の表象戦略と社会のあいだにギャップが生じたことが明らかにになる」。

異によれば出版メディアは、ツァーリ像を流通させる主体であった。ツァーリは家族とともに描かれ、ツァーリ表象の世俗化した。ツァーリの「自然的身体」に関心が向けられたのである。著者によれば、「政治的身体と自然的身体のいずれが注目されるかは、出版メディアが決定したのである。」 (p.161)

こうした出版メディアとツァーリ政府との交点にあったのが官僚クリヴェンコである。文才にも恵まれたクリヴェンコは、ニコライ二世の戴冠式に際して、公式アルバムの編集責任者と

なった。戴冠式のデザインには、「古ルーシ風の装飾意匠」である「ロシア様式」が用いられ、ツァーリはビザンツ皇帝の継承者であるというニコライ一世以来の帝国イデオロギーが強調された。そのためにクリヴェンコが公式アルバムの担当画家に採用したのがニコライ・サモキシュだった。彼はロシア様式による表現に巧みで、「ピョートル大帝による西欧化改革よりも前の時代を再現することを願った」ニコライ二世の戴冠式の記録者にはうってつけだった。彼は戴冠式の写真にロシア様式の装飾を施して、公式アルバムのための画像を制作したのである。他方、サモキシュは『ニーヴァ』や『自然と人間』などの「挿絵画家として著名」であった。

国家によるツァーリ像の創造に、「絵入り雑誌」の文化が深く関わっていることはそれ自体として興味深い。しかし、著者はさらに進んで、民間出版社の「戴冠式アルバム」に検討を進める。クリヴェンコが「戴冠式の取材機会を積極的に与えた」結果、「ツァーリ表象の伝達状況」は変容した。こうして、著者によれば「出版メディアが、ツァーリ肖像を編集し、社会に流通させる主体となったのである。…公式出版物が、皇帝自身の望むイメージを伝達する源泉として支配的な位置にあったわけではなかった。」著者はこの現象を「専制が政治的機能不全を起こしつつあったことの暗示」とも評価している。

ただし、この点について、メディアの主体性を過大に評価することはできないだろう。19世紀の末には、どこでも新たなメディアと帝室・王室との関係に変容が生じていたのであり、メディア自体が帝国への同意を調達する機能を果たすようになったからである（たとえば、フジタニ、『天皇のページェント』、多木、『天皇の肖像』）。クリヴェンコと出版メディアとの関係は、いわば相互的な協力関係だったと考えられる。もちろん、帝国の「協力相手」としてメディアが一定の主体性を持っていたことは間

違いないだろう。

また、ニコライ二世のツァーリ表象は、イデオロギー的には復古を表明するものだったとしても、現実には社会を広く包括する新しいナショナリズムの政治文化の一部であったことにも留意しなければならない。ペテルブルクの都市空間の変容について、アレクセイ・ミレルは次のように述べている。「帝国の中心として構成された都市空間は、次第にナショナルな意味を獲得していく。たとえばペテルスブルクである。そこでは建築における古典主義的な帝国様式が、ビザンツと帝国以前のロシアのモチーフとが奇妙に混淆したものに取って代わられていった。ペテルスブルクのアレクサンドル2世が暗殺された場所に、1883年から1907年にかけて建設された血の上の救世主教会にみる、ネオ・モスクワ公国様式とネオ・ビザンツ様式との独特の混淆を見れば、そのことが理解されるだろう。」(Stefan Berger & Alexei Miller, Introduction. In: Berger & Miller (eds.), *Nationalizing Empires*. CEU Press, 2015.)

この都市空間に生活していたのが絵入り雑誌の読者たちだったとすれば、帝国によるツァーリ表象そのものが、すでにロシア帝国社会の変容を反映しているといえよう。「公式アルバム」は、新たな出版文化の分かち難い一部分なのである。

## 本書の結論

以上のように、本書は非常に明快な構造を持っている。最初に「読者大衆」と新たな出版メディアの登場を描き、次に順を追って、インテリゲンツィア、ナロード、そしてツァーリズムというロシア史に馴染みの要素と出版メディアとの関係を考察し、ロシア史に新しい光を当てようとしているのである。さて、結論はどのように示されるだろうか。

まず読者大衆の登場の評価である。彼らは確かに消費者だった。「しかし、彼らが出版社

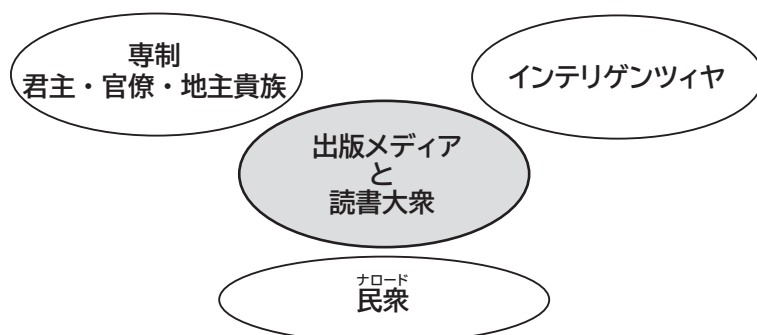


から消費者として遇される、能動的な読者大衆だったことは見落とされるべきではない。…西欧的なリベリズムがどの程度定着したかという判断基準から離れるならば、ロシア都市に固有の消費志向の文化を持つ大衆が現れたのはたしかだった。」

こうして著者は、帝政末期のロシア史に新しいアクターを見出す。それでは、専制の下で、インテリゲンツィアとナロードという相容れない社会

が対峙していた、という従来のイメージはどのように修正されるだろうか。つまり、出版メディアと、「インテリゲンツィア（高級文化 High Culture）」「ナロード（民衆文化）」「専制（政治文化）」という三つの文化はどのような関係を取り結んだのだろうか。まずこの時期、インテリゲンツィアの「文芸の共和国」は解体し、インテリゲンツィアは新たなメディアを通じて大衆と接触することになる。ナロードは、その読者大衆の一部分をなした。著者は繰り返す。「（ソイキンのような出版人は）農村で共有された伝統的な価値観や信仰を尊重すると同時に、都市の実利的、娯楽的情報を提供した。すなわち、ナロードは知識人によって受動的に啓蒙されたばかりではなく、出版メディアの発信と受信の主体となったのである。」この人々は、「都市のメディアを自ら選んで読み、一定程度、自らの文化を保持し続けた。」専制について、著者は次のように述べる。出版メディアの登場によって、「専制はその表象を管理できなくなった。ロシアにおいて、ツァーリは無制限専制権力を有し、全能の君主というイメージが国家統合に重要な意義を持った。」

こうして従来、交わることなく記述されてきた三つの文化は、新たな出版メディアと読者大衆の現場において、関係を取り結ぶことになる。



【出典】 異『ツァーリと大衆——近代ロシアの読書の社会史』、2019、13 頁の図版をもとに『クアドランテ』編集委員会で作成。

### 全体を通じて

さて、各章ごとに簡単に疑問を述べてきたが、ここで全体を通じて、評者なりの疑問を提示していきたい。まず先にも触れた「大衆」という概念である。本書では、「大衆」は、「固有の消費志向の文化を持つ」都市的な人々として想定され、社会階層的には、下級官吏から、町人、旧農奴身分出身の都市労働者まで含むもの、とされている。「絵入り雑誌」を通じて、ある種の消費文化を共有する人々を、固有の社会集団として析出した点、この人々の能動性を強調する点は、本書の魅力である。確かに、「読者大衆」の出現によって、「インテリゲンツィア」の役割が変化したことは、スターソフの道程から非常に説得的に示されている。しかし、「ナロード」や「専制」と「大衆」との関係は必ずしも明らかとはいえない。「大衆」と「ナロード」は、本書ではある場面では互換可能な概念であり、また別の場面では、別々の実態概念のようにも見える。総じて、「大衆」と「ナロード」の関係について本書の記述のなかでは「癒着」が見られるのである。ナロードニキであろうと、統治階級であろうと、ロシアのエリートには「ナロード」に対する根深い不信と恐怖がある。「ナロード」は専制という箍をはめられるか、啓蒙という規律化に従わなければ、「底の抜けた」（池田嘉郎『ロシア革命——破局の8ヶ月』）無秩序状態に立ちいたる、というのである。このような禍々しい「ナ

ロード」イメージの当否はともかく、本書の主人公たる「読者大衆」の向こう側には、文字の読めない（当時のロシアの識字率は、4割に満たなかった）「ナロード」の世界が広がっていたのではなかったか。

他方、それと対象的に、「大衆」と「専制」の記述においては、「読者大衆」あるいは出版メディアの自立性が強調されて、両者は対峙するものとして扱われる。このため、帝政のメディア戦略を含めた、新たな圏域のダイナミズムが必ずしも明らかにされていないように思える。

この点は、「消費」の政治性をめぐる次の疑問につながる。消費社会、消費する大衆の出現は、間違いなく近代社会の政治文化を変容させ、権力と日常生活との関係を変容させた。ナショナリズムや政治的な大衆動員、新たなツァーリ崇拜の創造は、間違いなく「消費社会」という場を前提としている。その点で、消費文化そのものに政治性が組み込まれているのである。本書ではツァーリ・イメージの形成について、新たな出版メディアの自立性が強調されているが、消費文化は、権力から自立した領域と考えるより、新たな権力関係が展開する「場」として捉えるほうが適切ではないだろうか。

最後に、帝国国制の変容のなかで、「読書する大衆」の出現を考えてみたい。「読書する大衆」と帝国とはどのように関係を構築しつつあったのか、という問題である。ロシア帝国の場合も、ハプスブルク君主国の場合も、19世紀後半から20世紀にかけては、帝国国制の集権化・近代化が試みられた時代である。従来、帝国が、「皇帝への忠誠を要石として多様な人間集団を宗教と身分に分類して権利と義務を分配する国家」（長縄）であったとすれば、19世紀後半の帝国は、直接に臣民と接触し、臣民を把握し、また臣民の声を聴きながら、帝国への参加を実現しようとしていた。社会に対するこのような帝国の前進に応じて、社

会には帝国とのつながりを媒介する公共圏が成立する。先に挙げた長縄は、それを次のように整理している。「（1905年革命後、タタール語による新聞・雑誌の発行が可能となった）タタール語の印刷物は、政府のムスリム政策・行政に関する様々な意見や抗議集会の模様を伝え、共同体／民族、世論の注意を喚起した。これはムスリム個々人と国家との間に別個の空間が出現したことを示している。つまり、様々な経路を介した国家との交渉が、増大する公共的議論に下支えされるという状況が生まれたのである。」（長縄『イスラームのロシア』）

ロシアには、ハプスブルク君主国とは異なっていて、都市・農村自治体から地方議会、帝国議会に至る選挙などなかったのも、ピーター・ジャドソンが描く、次のようにあからさまに政治的な公論の世界はなかったのかもしれない。

「（リベラルな市民層に対して、地方都市など地域社会のレベルで、職人など、下層中産階級が挑戦を始め、地域の選挙戦で勝利を収める）職人たちは、選挙期間中、地域の体操クラブ（ソコル）や合唱団（スラヴォス）から、地域の退役兵協会まで、あらゆる民衆的な結社を動員して、成功を収めた。さらに地方新聞が創刊され、拡大していったことも重要な要因である。そうした新聞は、挑戦者の側に立っていた。政治に行動的になった新しい社会層が政治に参入し、地域の要求を帝国に結びつけて実現しようとして、あからさまな闘争のなかで市民社会は拡大した。こうして地域社会と帝国とのつながりは実際に深まっていったのである。」

(Pieter Judson, *The Habsburg Empire. A New History*, The Belknap Press, 2016)

しかし、それでも「読書する大衆」に独自の文化圏を認めるとするならば、比較可能な現象はあったはずである。

本書の大きな貢献は、もちろん、魅力的な「絵入り雑誌」を通じて、ロシアにおける出版文化の実態を明らかにし、能動的な「読書する大衆」の姿を描き出したことにある。さらに、頑強に残るロシア特殊論からロシア史を救い出し、広く比較の可能性を開いたことは、特に大きな貢献だと、評者には思われた。